

真壁伝承館 (茨城県桜川市)

街並みになじむ地域の拠点 木製ルーバーで 壁面を覆う

重要伝統的建造物群保存地区の指定を受ける茨城県桜川市真壁。その街並みの中で、日本建築学会賞をはじめ数々の賞を授かった建築物が、落ち着いたたたずまいを見せる。地元桜川市が開設した真壁伝承館。図書館やホールを備えた公民館と歴史資料館の複合施設である。銅板パネル付きラーメン構造ながら、目透かし張りされた黒の木部が白の壁面と対になり、家型の基本形状やスケール感とともに街並みとの連続性を感じさせる好例だ。

元は何の建物だったかな——。完成を前に仮囲いが外され、黒と白の外壁が姿を現すと、散歩している方にこう尋ねられたという。「住民にさえ新築ではなく改修と思わせるほど、街並みになじんでいたのでしょう」。建設当時は桜川市の発注担当として、いまでは同じく運営・管理担当としてこの真壁伝承館にかかわり続ける市教育委員会生涯学習課の飛毛俊浩氏は振り返る。

切妻平入の正面入り口を入ると、左に地域活動や情報提供の場になる本館と300人規模の集会施設「まかべホール」、右に歴史資料館と真壁図書館。逆コの字型の建物が、公園に至る中庭を挟んで向き合う。白の塗料で仕上げた北面を除く3面は黒い木製ルーバーで覆われる。市が地域活動と観光情報の拠点として2011年9月に開館した。

周辺一帯は、江戸期以降の歴史的な街並みの残る在郷町。104棟もの建造物が登録有形文化財として登録済みで、市ではその保存・活用を街づくりの柱に掲げる。真壁伝承館建設中の2010年6月には、中心部17.6haの区域が重要伝統的建造物群保存地区に指定された。区域内には、木材や漆喰の壁面を見せる切妻や寄棟の2階建て家屋が建ち並ぶ。

こうした歴史的な街並みとの調和を第一に考え、真壁伝承館は建設に至った。建築設計を担当したのは、渡辺真理氏と木下庸子氏が共同主宰する設計組織ADHである。

街並みとの調和を意識した設計手法

敷地一帯にはもともと、旧真壁町の公民館や歴史資料館、公園が立地していた。「ところが、これらの施設は老朽化していたうえに、点在していたことから使い勝手が悪かった。2005年10月、2町1村の合併で桜川市に移行したのを機に、複合施設への建て替え



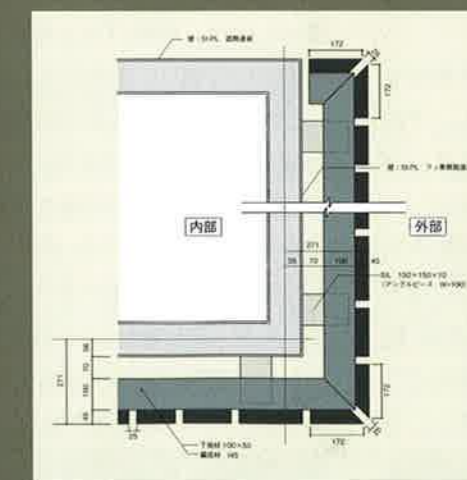
写真上：西側外観。左に本館、右に歴史資料館。中央のエントランスをくぐると、中庭が出る。東には筑波山系を望む

写真左：東側外観。山の稜線に似た切妻の連続で家型の基本形状がよく分かる。左手に同時に整備された公園が広がる

写真右：中庭。左手に本館と「まかべホール」、右手に図書館。銅板パネルを用いた横法で開口部を自由に確保できる

● 木板透かし貼り部分平面詳細

銅板パネルの壁面にフッ素樹脂塗装を施し、その壁面にまずアングルピースを取り付け、そこに渡した100mm×50mm角の下地材に厚さ45mmの編成材を固定する造りだ。壁面との間は170mm。壁面に露出する設備配管類はこのスペース内に収まり、外観上は目隠しされる。間隔は25mmで一定だが、幅の異なる数種類の部材を使い分けている。



編成材とは、間伐材小径木に加工を施したものを束ねて接着し幅広の厚板を割安に供給できるようにしたもの。間伐材の活用策の一環として生み出された。真壁伝承館では、市で地元産材の活用を望んでいたことから、スギの間伐材を編成したものを採用している。

今後の課題は 運営とメンテナンス

建て替え前の公民館は鉄筋コンクリート造3階建てで10mを超える高さがあったため、真壁伝承館に生まれ変わるまでのおよそ40年間にわたって、東に位置する筑波山系は街中から望むことができませんでした。それが2階建てになったことで、「視界が開け明るくなった」と歓迎されています。そういう意味でも、地域になじんでいます。

新しい施設だけに慣れるまでは多少の時間が掛かりましたが、その後は使い勝手がいいと好評です。約2800㎡の広さに各種の機能がコンパクトにまとまっているのが良いようです。観光客向けには街歩きのための観光情報の提供拠点としても機能しています。

開館以来およそ1年半の間で来館者数は26万人に達しました。この夏までの間には30万人に達する見込みです。今後は、まちづくりのための施設としてもっと機能するように、運営に工夫を凝らしたいと思っています。同時に、建築物のメンテナンスも不可欠です。経費節減の観点から、木部はある程度自前で塗り替えることになりそうです。入手しやすく作業性の良いキシラデコールは、その点でも使いやすい塗料です。(談)

開館以来およそ1年半の間で来館者数は26万人に達しました。この夏までの間には30万人に達する見込みです。今後は、まちづくりのための施設としてもっと機能するように、運営に工夫を凝らしたいと思っています。同時に、建築物のメンテナンスも不可欠です。経費節減の観点から、木部はある程度自前で塗り替えることになりそうです。入手しやすく作業性の良いキシラデコールは、その点でも使いやすい塗料です。(談)



桜川市教育委員会
生涯学習課伝承館グループ
飛毛 俊浩氏



東側の公園から見る。敷地は江戸時代の役所である陣屋跡であることから、その遺構をウッドデッキなどで表現する。外構には地元産の御影石を用いる

氏はこう評価する。「木肌を隠さない含浸型の木材保護塗料は、数種類の製品に限られます。その中でキシラデコールは、一つのスタンダードと位置付けられると思います」。

木部の黒と壁面の白の対比的な仕上げは、サンプリング&アセンブリーの考え方に基づく家型の基本形状やスケール感とともに、街並みとの連続性を醸し出す。そうした連続性に、地元の住民も呼応し始めている。

「近くで建て替えた商店は、重要伝統的建造物群保存地区外で助成が受けられないにもかかわらず、街並みに調和した造りを取り入れました。『きれいになりましたね』とご主人に話し掛けると、『これに似せなきゃなんねーな』と伝承館を指差すのです」。飛毛氏は表情を和ませる。

過去と未来を結び付ける中継点——。真壁伝承館はまちづくりの角度からも「伝承」の役割を果たしつつある。

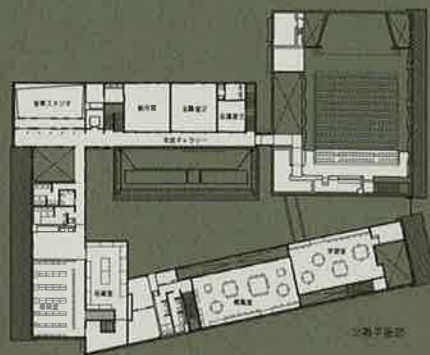
編成材を、木材保護塗料は質感とメンテナンス性の観点から、造膜型・半造膜型・含浸型の3つのタイプを比べたという。

比較検討の結果、採用を決めた木材は、編成材だ。設計組織ADHでは、兵庫県西播磨総合庁舎(2002年7月開設)で同じく壁面を覆う木製ルーバーに採用した。「この時は、曝露試験を実施した結果、割れは若干生じたものの大きな狂いは生じなかったことから、使用に踏み切りました」(渡辺氏)。

編成材に塗装する木材保護塗料には、含浸型のキシラデコールを選んだ。飛毛氏はその理由を語る。

「キシラデコールは時間とともに変化する木の質感を表現できるうえに、劣化した箇所だけに重ね塗りしても見劣りしない点で優れていると判断しました。含浸型なら、湿気の出入りを妨げないので、木材本来の性質を損なわないとも考えました」

兵庫県西播磨総合庁舎の木製ルーバーにもキシラデコールを用いた渡辺



写真左：図書館。蔵書数は約1万7000冊。1階に開架室と児童図書室を、2階に閲覧室と学習室を持つ。この図書館部分だけは内装も鋼板パネルで仕上げた。施設全体で導入したOMソーラーシステムでは、太陽熱によって屋根面で暖めた空気をいったん床下に送り、そこから壁体内にも吹き出させる造りをとる



写真右：歴史資料館。桜川市の歴史や真壁地区の歴史的な街並みなどを紹介する常設展示のほか、さまざまな歴史資源を「たからモノ」ととらえた企画展示を開催する

写真下：集会施設として整備した「まかべホール」。可動式いすを引き出し、最大300人まで収容できるホールとしても利用できる。音響コンサルティングは永田音響設計が担当した

●建築概要
所在地：茨城県桜川市
主要用途：図書館、歴史資料館、集会施設
敷地面積：3271.49㎡
建築面積：1728.84㎡
延床面積：2742.64㎡
構造・階数：鋼板パネル付きラーメン構造、地上2階
建築主：桜川市役所
設計者：渡辺真理・木下謙子/設計組織ADH、
新谷真久/オーク構造設計
施工者：五洋建設
設計期間：2008年1月～2009年10月
施工期間：2009年11月～2011年6月

を決定したのです」(飛毛氏)。

図書館、歴史資料館、集会施設という3つの機能を、床面積3000㎡の中に収めることを前提に、市では2007年度に設計者を選定する公募型プロポーザルを実施。2段階の審査を経て、登録申請した58者の中から設計組織ADHを選んだ。飛毛氏は「サンプリング&アセンブリーと呼ばれる住民とのコミュニケーションを前提にした設計手法の提案が高く評価された」と明かす。

サンプリングとは、街並みを構成する家屋を一つ一つ詳細に調査し、そのプロポーションやボリュームをサンプルとして収集すること。アセンブリーとは、そこで得られた基本形状やスケール感を設計する建築物の中に落とし込んでいくことである。渡辺氏は「歴史的な街並みに調和した建築物をどうつくるかという点を考えた結果、こうした手法に行き着きました」と説明す

る。

市では提案に基づき、関係住民や公募住民30人規模でワークショップを開催。設計組織ADHではその場で街並みの模型を活用しながら、敷地内にとの機能をどのように配置するか、サンプリング&アセンブリーの考え方に基づき参加した住民と検討した。その結果を踏まえ、当初の提案に修正を加えていった。

北面を除く壁面を木製ルーバーで覆ったのは、鋼板パネル付きラーメン構造という造りに由来する。

この造りは、構造材の鉄骨に溶接した鋼板パネルで壁面を形づくるもの。渡辺氏は「漆喰壁の平滑さを表現できると考えました。コンクリートでは、一定間隔で目地が現れるうえ、塗料のりも良くありません」と指摘する。

しかし鋼板パネルのままでは、日射熱を吸収し、「熱膨張を起こしたり室内の熱環境が損なわれたりする恐れが

ある」(渡辺氏)。日差しを遮る木製ルーバーには、これらのリスクを回避する役割が与えられているのである。

モックアップで 木材と保護塗料を検討

これに対し、日射の弱い北面だけは、鋼板パネルの継ぎ目に現れる溶接箇所をグラインダーで平滑に仕上げたうえで、遮熱塗料で仕上げた。表面に汚れをつきにくくする光触媒技術を応用した塗料も同時に用いて、壁面の白さを保つことにも努めている。

こうした外装の仕上げを決める過程では、敷地とは別の場所に1畳ほどの広さを持つモックアップを立ち上げ、そこで比較検討を重ねた。

「鋼板パネルの溶接や軒天・窓枠の造りを検討するのに併せて、木材の種類と幅・厚さ、そして木材保護塗料の種類を検討しました」と飛毛氏。木材は安定性の観点から、スギの無垢材と

木材の質感を表現する木材保護塗料「キシラデコール」

木材保護塗料には大きく分けて、含浸型と造膜型の2つがある。含浸型は、防腐・防虫の有効成分が内部にしみ込んでいくもの。こまめな塗り替えは必要だが、そのまま上塗りできる。これに対して造膜型は、木材の表面に塗膜をつくることで、耐候性や防腐・防虫の効果を発揮するものである。塗膜はは

く離するので、塗り替えは必要。塗り替え時には、はく離していない塗膜も除去する分、手間は掛かる。キシラデコールは含浸型の代表格として日本で40年以上にわたって使われ続けてきた。造膜型のように木材表面を完全に覆ってしまわず、木材の質感を損ねない点が、建築関係者に好まれている。

お問い合わせ

日本エンバイロケミカルズ株式会社
www.jechem.co.jp ☎0120-124-123

●大阪 〒550-0023 大阪市西区千代崎3丁目南2番37号 ドームシティガスビル FAX.06-4393-0054
●東京 〒105-0014 東京都港区芝二丁目5番10号 芝公園NDビル3階 FAX.03-5444-9860

キシラデコールに関する情報満載!
www.xyladecor.jp

(資料請求番号 1)

XYLADECOR
Since 1971
40th
Anniversary

40年前、木材保護塗料として生まれたキシラデコールは、
40年間、多くの方に信頼され、今なお使われ続けている。



「キシラデコール」は高山市三町伝統的建造物群保存地区でも町家の保護・保存のための木材保護塗料として採用されています。



多くの木造建築・施設での利用実績が品質の証し

Xyladecor



木材保護塗料売上実績

業界No.1

— 2012年度実績 当社調べ —

製造販売

日本エンバイロケミカルズ株式会社

提携先: AkzoNobel Deco GmbH

【お問い合わせ先】

0120-124-123

大阪 〒550-0023 大阪市西区千代崎三丁目南2番37号 トームシティガスビル FAX 06-4393-0054

東京 〒105-0014 東京都港区芝二丁目5番10号 芝公園NDビル3階 FAX 03-5444-9860

www.jechem.co.jp/ 【キシラデコールに関する情報満載！▶ www.xyladecor.jp】

〈資料請求番号 1〉